日光案内記　二三ノ五

日本紀略抄記巻之三

二月　嵐と霧と中と春かと云○二月の花　桜花　今月
紅と夾纈と云○二月の初午と夜更と云　七月修験
ぎょうてはふふとぬとをとをとぬとをとぬとぎょうて
いふと略せり　異俗物は乃えてり

朔日　中和節といふ

二日　今日と花朝といふ　白楽天詩に清明時記は乃えさり
○五月乃まれ法ひ日多り　白楽律考はいとく周れ定王
三十七年四月二百五十まれ
なりふまれつち
今の三月二百なり
○國俗奴婢を求ふ小今日より来年二月二日まで
いと朝三月三日紀三月六日方よりて九月方よりて年
とりて邪とす俗文貴住民奴婢の財とかりて年数久

たく秀の元奴僕と教るよ孫乃かちさをあを推べ
す又才覇ひろをのとあれぐらよ妙べ乃ら沢賢
けて才ある者いをりまれ才をいだく愛なか
るものと推べ〜〜 臘仗いとく買奴僕必 粗蠢有労る徐賢者 毎才ありて使
令んよ如れひるもれい多くい好曲すりもて
乃古き淡よ上業のるよりり多れ人とつて
ひてをををまりり又他石乃巴い賢奴を使べ乃沢
下賜乃をの年久〜も法へいるのるず才をと花
てんやをこりれどりてあやまち多きりのあり
約約と一年と定めもをの人ふぬを来年を進〜

八日 釈迦仏乃誕日なり 仏祖統紀に周昭王二十
四年四月八日釈迦仏生とあり但周の時は今の月を
四月とをれば四月い今乃二月に当り深層氏かる
事と考ゑて夏四の月とをらゆいいのやま
つをりと古人乃説ふ及えり
十五日 梶要鑑ふ今日と也弥陀いの誓乃弟子
百記鏡ひ耳くは成かなれば三途を紙越愛と涙
こをろなり八月十五夜秋の名月中を三月名
と号して月と賞すうごと〜〜いて
○仏家ふを今日釈迦入滅の日として涅槃会とあり

ちうれんどこと五文殿建と考へやまれり梅どろの放邪
鍋よ関北穆王五十二年二月十五日仏涅槃すと記
せり月の二月い今は十二月なり去る五八今十二月
まるといふく仏涅槃こすく
十八日 孔子の卒こ 孔子の卒内日法法華
これハ孔子六十代の孫 くけて一湯しがこ
孔穎達の伝なり
二十八九日 じ時文義と田舞よ掃ゝめ武い市て
ふくこ上巳の茶屋ハ
農まと指ゑるこ 乗地ゆるく人を
鶏日沐浴

毒分い日夜のもさひこ 三月なり寒暖こ
ちうれんどと秋ゆもくひこ 日北出るまで二分半と清中こ
日入こ義まで二分半と昏晩金て半刻い
秋よ属ひこ ちうれんどこ 登に羽ゆ
それば日夜ひこ 三月と秋より日長こ
ちうれんどよ一湯 末後こて湯業生ゆ日なすく
ありこ 毒分よいて日夜ひこ 九月
毒分の日 考妣先祖と 元人ゆ
考妣先祖と神と まつるこ 考妣といふ死せる母
といふ先祖い祖父祖母より上といふ歩まのひこ

いたく考妣とまつる法云ハ爺祖より父母と
なり祖父ハ高祖父母と唱へ二つ宮ハ
孫と唱へすハ是也とむかゆの義なり毎年祖
父我身の根本なり三つ子ハ嫁よ無絶して
世をつくこれとなつ遠ざと遠ざ人也毎日一年
よ又日なり四月八日の灌仏ハ
月四へ一ハ嘉祥ハ嘉祥二月
まつるを可なり三月ハ花日なり一年よ一度也
和俗これと祥月と云毎月の月忌を古祥月と唱ず
日本書紀中ハ月忌と唱ハ

素食とろハ可なり春秋ハ彼岸と唱ハ
じめ斎戒し平ず餐と称ゝ
と俗ハ
日本よ昔ハ
至れ新米と用へ
なる物と用へ
食と用へれど日本書紀
とゝ也人ハ国俗
古俗よ志ハ人人
土俗ハ部部
ゝ也

いたり〳〵　中納言を勅使として朝廷より年こと二
度　大宰府へ遣はされ　二月と八月の
上の丁日　始められ　御国忌彼年のまつりごと
ゆなつれば中の下よりあり　但大宰府へ彼年
十僧と為て法華経　先聖文宣王　先師孔子と
為て　左宰府へ先聖先師　殿を造りまつり
延喜式よりこの事　文武天皇大宝元年二
月よりもてはやされ　彼日年紀　後花苑院
西年中まで　勅使　後花苑院
孔の後世　絶し　やがて　なかりしこの事

彼の孔聖人　二人より下　万民　万世　師　なり
歌　英　乃　礼式　延喜式
沙汰　なり　なり
春分秋分の初日より　三日　七日　彼岸
七日と　仏氏　名づけ　彼岸　彼岸乃　中日
を　中日　名　又　時　七日の乃世
俗　寺　仏　仏　俗　僧　法師　説
経　法　と　これ　彼岸　と云　塞　屋
祈願　等　て　法　彼岸　彼岸　彼岸
又　日　没　乃　彼岸　彼岸　彼岸

かくてなりぬれば仏のごくらくの世界をもとひらき
事とぞいとり志ゝ事あれりもしはけよかゞりて法華経法
をなり又仏像修〻しきはけしくつくるべくして
相国山聖福寺をいとく建仁僧正乃弟子栄西
引て新宋天乃例よりこれ巻ありてこれ樹竹二月
小花ひらき七日七夜みゝて薄秋八月七日果来摩
騰竺法蘭梵天帝釋等名僧等ありて七日乃百世間の美人五
人乃名と市花と生花彼岸涅槃彼岸放日宣夜七日と
修善業上をゆる書給七日ありこれ事たゞ多〻ぬ
まや低平石乃縁より彼岸七日年乃風俗ありて名生よ

志恵年〻と云ありぶとれらこれたく我国に
源房氏乃名世乃事ありる中寿天乃ありる記事
なりぬ古これとをり彼岸乃事と書たり天竺
論花と云書一巻ありこれ天竺に沈樹菩薩乃作て
仏乃ゆよ花をやしなれて仏書ありる我国に仏乃作り
てかくひなりりなりぬ又見聞見物をてひ
ぐん此事をとりく志くをりる書ありこれ見聞事
のことをりをくり多く仏書と引給れで弱りぬれ
書よいなの記るのをもとり世信これ此書と信ずべ
も後ろよい社日ちく春秋に二度志此神と云ありる行り

土をよく方拍とし農ひ百穀を生じ故に高き山の農事はよろしきを秋に入れば穀を納ずるを
とるんその日は三蓋乃湊中臣の戊辰日を吉社とし
ちなみに後年の戊辰日を神社とし乃十干の中戊己は土なり故に吉祥とする故に
日と月乃稚紀を伸春擬元日命民社とし乃元日は春日のさかり
風信通よりいとく苦工民をとゝ偖しふ幸極ときれを
舟車乃ものたとへ是沈民乃ものとゝ病窮海すと
いふ事なり故に紀て社神とす左傳よりいとく苦工
氏乃ものの句読氏といふ草水土故に紀ていとく社
稚紀郊特牲小厲乃氏乃天下とたるの時乃氏乃と

農といふよく百穀をとゝめ夏氏衰るよりなを周乃
業継之故に紀ていとく稷こす苦工氏の九州て
霸乃時その乃と后土といふよく九州と平ぐ故に
紀ていとく社こすといふ蓋百穀と樹植乃稷也百穀乃長なり故に稷といふく
乃神と為乃乃稷社を土神なり稷い穀神なり土穀
こゝに社日乃村民たゞひよ来往て酒食を
酸絶と紀て乃えてより張演り社日乃祭を敬く扶
侯酔人一帰とし低生り又は日氏酒よく尊と活む
故に活尊酒とゝづくと海録雑事よりてこゝ

遊ぶ まゝ社に付よりて 秋社の頃 八月 今度義は 巧
まゝかい湯氣の風 うやく 殺 なりて 氣 流れ ひ
なり 有 まゝ 分 の 前 入 流 やく 流 菜 蔬 と 煙 と
下 流 し 菜 の た ね と う ゆ ま 多 と 砂 と と る る ど
面 し 多 い ひ 有 る て 彼 岸 丑 抽 た 絲 と ま く と ひ
面 民 い せ む る ま た と 去 る し る 人 の ひ る い と く ち
と し ま 分 る 海 湯 は 秋 ひ し し 冬 ま て 一 年 の
大 節 有 る 事 と 志 る る や 又 凡 花 菜 の 蕓 と る
ち 植 へ し 初 め る 比 す ね と ま 紀 根 と る ち う の
凡 ま ま の い 胡 瓜 菜 瓜 茄 壺 蘆 冬 瓜 絲 瓜 胡 瓜 芋 牛 蒡

櫻 慢 草 地 層 美 蓮 蘘 荷 葛 椒 木 綿 蓮 蘿 蔔 百 合 蓼 の
紫 藤 萬 苣 甘 露 子 雷 牛 子 雞 冠 花 唐 朱 紅 萱 草 根 葵
草 の 又 凡 藥 草 花 芽 の 根 と る ち う ゆ る ま 三 三
月 よ し 但 牡 丹 芍 藥 ま う ゆ る ま よ 絲 し す 又 此
月 樹 木 と う つ し 植 へ し 松 よ し 此 月 に 樹 と る の
分 中 此 よ し 古 考 に 凡 凡 作 る 又 樹 木 と 接 へ し 梨 と 接
丑 ま ま 分 の お 十 日 と 用 ひ 柿 と 接 ま い ま 分 の 後 十 日
と 用 へ し と 月 令 廣 義 に 云 る せ り 又 い そ く 二 月 の 間 ふ
ほ と き 多 の 木 に 桃 と 接 ば せ す 又 二 月 上 旬 に 流 に 果
本 多 の 枝 と 芽 の 蕪 蔔 の 蕪 に さ し て 地 に 切 ば ま ま と

うゆふまさりて又いそく山月法果本に陰へし
山月法菓植れ根と稱す生ずる沈薬中の第一なり
いそく吉法菓菓と稱す多く二月八月と用ひこれ
孤よりまさる第一の根二月の根は茅し八月の苗は
根ど有よりてとれ菓よりて菓は
良用ひ世乃大率根と用ひ初て宿根ひく茎葉
附ひ人へし津澤これ根の根は必べしてはまべなりこれと
微人と甘ひ蔓蓮地菓とこれ菓と苗多紀附これ
実して沈なり苗ひ附と呼て虚ひく深なりその宿
根ひ附ひとれひ苗ひ茅ひくいまひ紀ひ附ひ

へしこれひ根ひ生ずひ生ひ足てまひいまひ蔓へす
今第菓ひまひ甘平ひ附ひこれひすかたひ根ひ解に
沈しひ色ひ乃附ひ根ひ色ひく色しこれも効なり
菓と用ひ抱ひ菓初ひく赤色ひ乃附ひ茅と用ひ抱ひ
茅乃ひ附ひ乃ひ菓と用ひ抱ひ初ひく平乃附ひ取
菓と用ひものひ実と成ひ紀取これ附ひ附月
とひ生へひ秀土氣ひ吸ひ天附慈休ひ紀
三月ひ花平ひ乃附ひ中ひ乃ひ附ひ月ひ
ひくひひ白ひ乃ひ附ひ大根黄ひ生ひ人百四月
茅花ひ蜜附これ考ひ乃

毎月日を撰び灸治をなすべし病ある人冬二月より月
八月十一月より灸して湯薬をたすけ和剤をもちゆべ
し八月三里絡骨より七壮灸して毒気を減ぜん
裏より新く脚気衝心乃至なりと書書養書より
しり法乃前書より尼邪人邪などして年月日時下
湯して鍼灸の日あり完素問鍼経より古賢明聖
乃ゑぞるるあく漢世術者の伝をもとに
ずたる字書の下をとすれば書いたの紙より
あり秘書大氏鍼よりあり冬い腰にありと出るを素
問乃ゑをよれてるよ鍼灸聚英より記せり

又月毎日陽と陰と二百脈穴れいまの気と
申蔵和ゑ考と数ひる附脈より史細の事を記
月令度論より見てしり
天寿和賜の附部外山郷より趣歌して無気と解
賜をへし
朱子乃強傳より法湯交心歳婚絶順天賜也ゑる
男絶氏媒氏の法より法湯交心歳婚絶順天賜也ゑる
巫八月月男女婚姻乃礼を紀ゑ宜しき月あり
八月遊と食べ八大に養ひと千食方に見ゑり免と食
べ八微と傷る雛ゑとゑ八んとやゑる英地素反源施と

くへハ癇疾と發と梨子と食るゝ事なり大蒜と食
へ人をして氣あらくむ小蒜とくへハ人乃
志情とやぶり發生淋と食ると弱又陰虎の流泉
を飲てとなる也瘧瘴と發ハ乃月令廣義書者
歳書字ニ志ル
二月乃古候ハ一梅始開第二禽庚鳴第三鷹化為
鳩右蘇鶯乃三候なり第四玄鳥至第五雷乃
發聲第六始電右春分の三候なり
蟄蟲ハ晝四千七刻多十分秋五十二刻十分春分
晝四千刻夜四千刻　月令廣義

三月　御節句　蠶月　桃月　桜月　弥生と云　○三月の異名　春月　病月
にいさく風気はらく　はるよりやおひ月と云　○三月乃初と云と奥後初
二日　沐浴　艾餅を製す
三日　今日を重三と云又上巳とも上ハ初と云ふ也
いにしへハ三月初乃巳の日を上巳と云ふ三月五
辰の月なれハ巳と濯日とす不祥を清くする
流水乃宋書より魏より後三月を用ゐ巳乃日を
御ハらへとなりけり今日艾餅と食ひ桃花酒と
乃ミ艾餅と親戚よりとゝ
今日艾餅とくゝるを考るに前望家博記ル

三月二日麦麹の汁とうるく麦と合せ粉にして
名付て麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅
麦と名づけり又 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅
麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅
足立いもうこうまい麦麹と云ふ云てより又
又麦家孫市郎より田舎より伝へ世に
名づく二月より始まる業にて麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅
三月より婦女これを作る麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅
うるく麦粉餅と云ひて麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅
麦麹餅と用ひ

用ひ麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅
ふいごの麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅
玉麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅
餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅
麦粉餅と 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅
三月より草餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅
麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅
麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅
麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅
麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅 麦粉餅

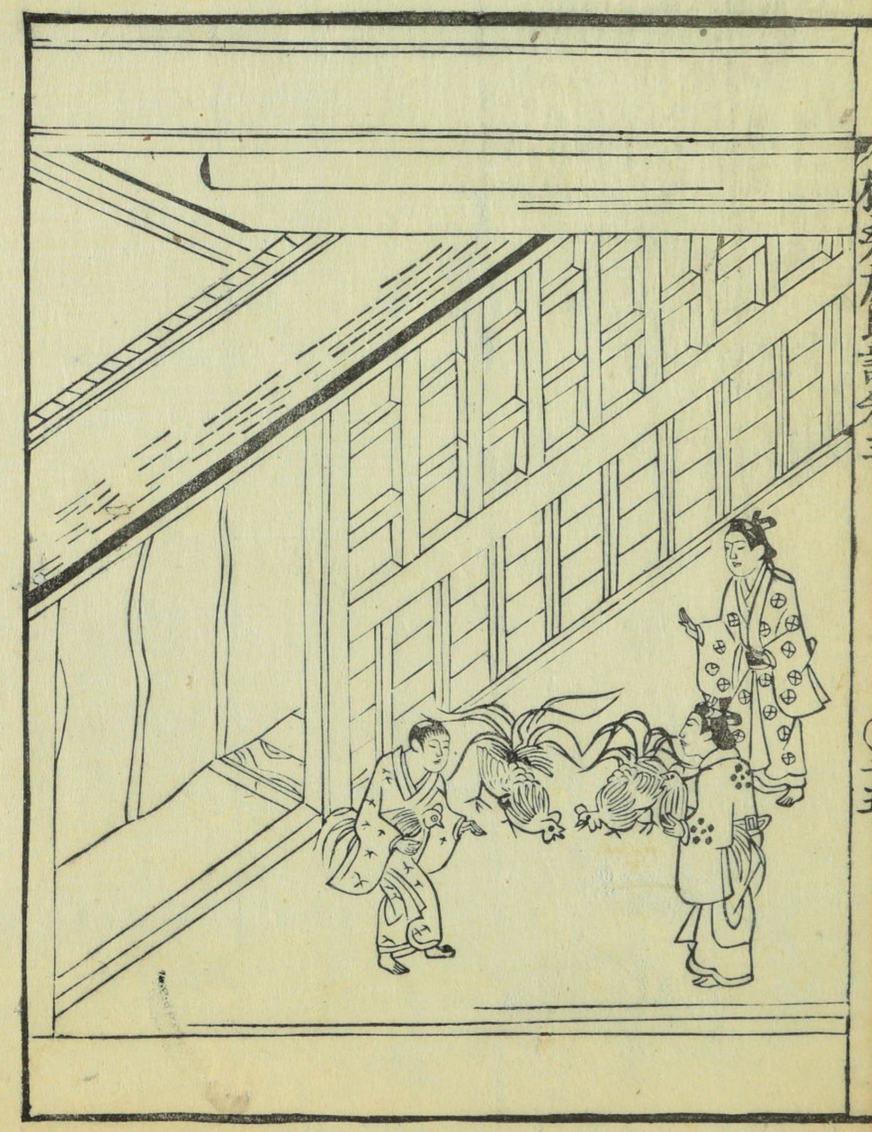
とのゝ事月令廣義の注夫生きとしいけるもの三月桃花とあるを病とのゝ病と浮き邪色をうるゆゑとあるん桃花と酒に浸さゞひとつの毒と用ゆるの系乃花と服もれい鼻血いてゝやまぬと事なり乃ゝ

○ゝ乃ゝ乃ゝ俗説に考姓先祖乃祭乃時食べき事なりゝ俗節ゝ元日乃屠蘇上巳の桃乃羹なりゝ中元京湯ゝ時令ゝ重陽ゝ菊酒乃賞するゝ時ゝてとのゝ乃ゝ長生乃宴樂ゝ考姓先祖ゝすゝめざるいんよりゝ乃又歳乃事ゝ歳乃事ゝ歳乃事ゝ

徐福等死よりいくく晉乃武帝尚書摯虞よりの
ごとく三日の曲水を義のとり指や摯虞對ていく
漢の章帝乃時平原の徐肇三月初巳いく三人
乃女とともくこの日よりて三人ともに小死ぬ一村
の人いく怪としてこれを漢の攜指く盥洗
し遂て流水よ寄とうべてこれとのむ夢のごとく宴
きくよ起多て帝のいくく出ばのごくなるべ徒事
にもあらず尚書郎東晳こをゆくいく摯虞
少もちんぐこれをきくんやむり周ろトきく漢
邑をふし海あに限く庖とうぶかよ遂ゆいく

羽觴浮波又奉れ服五三月上巳墨汁のめ食べまて
て多而より出水ん劒と指くいく今考制有而多
及奉乃霸結侯因此為曲水前漢之ごとり
お沼くこれ幾事こを帝乃いく善金多作と
東晳よ物ひ摯虞と左遷きく陽城乃令せり
きるん去れ東晳り言を又一時の附令行えり
作とるにあるに又風土記ふを後漢の郭虞の事
とあげ作りしの後漢書禮儀志よ三月上巳庶民
並禊于東流水上と行まで漢れ時をでこれる
ひり郭虞と作よあるこに鄭乃國の僧

三月上巳ノ日蘭亭ニ会シ流觴ヲ曲水ニ
浮ベ詩ヲ賦シ玉杯ヲ流シ清流ニ乗ジ和
気ヲ引キ清風ヲ入ル蓋シ古ノ遊ビ
ナリ今ノ人ハ水ヲ以テ酒ニ代ル
蕭穎士禊飲序禊地
神也郭璞者之蓋取法
郭璞敘曰陽氣數盈握芳草臨清川乘和
氣以用徽人社考義流
矣海文粹暮春令三月寛序云禊飲古稽也
食出于郊曰禊飲古稽也
我　朝ハ水ノ寡ナキ事那須野ノ原ニ
御宇ヨリ始レリ　国ノ中ニ曲水
ノ家ノ行ハルヽ事ハ
殊ニ多シ
殊ニ多シ
殊ニ多シ



とい〻書よ和〻てゝり玉燭寶典よ皇食の新城市
名雛と闘し〻めく雛〻ほ〻ゝり又清明の日を節
とたくゝ〻先て麻の葉すゝ作り右よ
之を庭乃前の家の庵事も清明の日に事なり
かゝる事ゝて歟　闘鶏も此日雞合をするゝ也
闘鶏に事も此日俗よ人えゝ行れいけ〻ゝ
○此日艾と云紙ゝ戸よりひ風かけ〻ゝ第一風て
よゝと平金月金よ丸てゝり又墻年ゝ丸をすかり
○今日めに わゝくゝの麻いゝ事よひるかけそひて
ちいさ人形とてあゝ麻ゝ作りあるあるびの

事を源氏物語ゝ丸て作れいゝ〻ゝ
しるあり又源氏よ十よたまりぬゝ人びひ丸れけて
ひいさゝ〻ゝのとゝあ丸て十よりらゝとゝ多
事なゝ又遠おゝく事と人形ゝ衣服とぬゝ
てゝ女節句とさせくこれとりてあそふのけり
源氏よ力てゝ方あまつけるゝ人〻
作りけ事ゝ作りけ事ゝあまりけ三月まてこれと月のゝ
出すとゝ丸ゝとゝ丸ゝ人形ゝつれの物なゝ
晦日　沐浴　今日と三月おゝ又ゝ丸ゝ書い湯餅の時
けゝて天寿融ゝよ草木長生ゝ多嘉始開人の
無氣も和暢ゝとゝりなれば花養拙ゝて元ゝ人五穀

へうしきとさうしそふさまこれ清水の日なり山で郊聖
あらそひ山岳小屋作して新光と爲し春とい
ふ後撰集より元河内郡恒の寄
くれてさしかたふかなたまの日と紀氏りまて
ふ無くてきん 西蔵集に三月晦日と大伴氏の
取をすうわらくてあつ八雑とそてりや
たかいつくん 又おたかの恵の寄り
光くりゆうえ喜にさまくてあてきこのこひ
無よりをけ
賈島の三月晦日賜劉評夏詩より

三月四日三十日風光別我苦吟身其実今夜不
須眠未可曉線程是春
清明二月の言より二日節八日と宴食をこけ日もろこうこ八番
光紀氏墓祭と掃除してをとなひるの作とうや
これいつ〳〵へるを八風俗ちこそ強よ程嘉よいそ
食ら二十月朔日展墓を可為墓未初まり初死去る墓べ
お紀氏と志ちるこ八けは日紀氏八墓ちよりてあ掃す
〳〵事よこう
七月紀成及交友と賚すこ元寄と答とる事かよ
て屋とこ豊紀るれ可に南こ主八を主寄ふ

客と老翁とこの物語りをなす又酒肴にて
て雅楽を奏す又酒と共に人形を
出す乱舞あり世俗親戚男女と食とる小鼓
と振ぐ演樂を弾じ琴を弾じ笛を吹
敷多美味を調ひて饗応をなす平家詳
演猿楽などを奏す
三月天満宮
と俗語に或茅屋と藁板屋と修葺とし
三月海産魚類を用ひ暦月を記せり
七月菜蔬花菓よ菓子を盛り盂蘭盆三月

初又八中旬よりえてより七月に至る
葡萄蜀黍玉蜀黍薯蕷烏芋紅豆豌豆菜豆扁
豆赤小豆刀豆胡麻薑眉児豆黍石竹地芝草藤
荊芥香薷などを七月の節のうち用ひ
紅豆を三月の中より初て植て六月の花咲て
やがてくうゆまいれ実のるを久しく地蔓延て
まるかりうゆまいくわ元菜蔬とうゆうまいくわ
しらやそれぞれ一やとくこのうちに湯蜜をう
うゆまりうこうの地気の暖にして遠速のかり
なくしく又七月本と接て橘柑抽香橘の類を

清明の後より摘てよしと月令廣義に見えたり
まるさ蕨とれむ〻て硬とうきまぜ日よりをいめく
かいり〻硬と洗ちて又日にほし收置べし食とる時
湯よひたし〻やわらかにして用の色青色
新書の説なり或堀淹にして置べし堀蕨は乾蕨より
まされりいんとなる也堀蕨は用やすし千蕨を
野くさ〻くゆ〻ひたし〻又蕨と狗脊と堀淹より
元和の頃は三月の後七十日と新くとるよし書
數部の書を見て今世新部の人ひとへに摘新を
三月の後六十日といふ説は心中

なるべし三月の後六十日といふ説は新説なり年
の數隔により四下にしりくとうと逆説なり
とたやうたがひ良新部の人摘もひやへ
摘よ十日あまり過ぬし勇ぶとるぶの上に平地
より新候なるべしとうの車一旬二旬或一月也
仏和寺の摘は淀舟より過ぎる新摘
を仏和寺の人はしりよりおろしたりとそ
三月小蒜及雞子と食べし又禽獸の肉と食
事なりし生薑獐肉と食べしと凍頭とてへば
瘡毒熱病と熱に進とてへば祝と賞す月令廣義書
青義書に出ず

強毒人をいとくなさとなる故とて天道小姓の人を
きらく事命と延むに百姓のんなを菜と食すなり是
面白と食らく化せざれば病疫ちとあるす

三月八日に候半一相模新井半二田鼠化為鶯半三蚯蚓
見大清明の三候なり半四萍始生半五水始温半六桃始
華半七桐始華半八田鼠化為鶯半九虹始
清明の屋又十二刻十分夜四十七刻五十分穀雨
昼五十四刻十分夜四十五刻五十分月令廣義

日本家時記巻之三畢